

自己回復・自己発見の力を育てる

— 定時制高校におけることばの学習より —

片桐啓恵

はじめに

「生徒の居場所づくり」宣言と学校づくり

長崎市立長崎高校は生徒数約二百名の独立定時制高校（普通科・商業科）である。定通制統廃合の危機の中にあつて、定時制としては県内では大規模校に当たる本校も過去数年間で生徒数が百五十名近くまで減少し、教員数も二年間で四名減らされ、このままではいづれ統廃合の攻撃にさらされるといふ危機感が管理職・教職員の中につのつてきた。

児童・生徒数そのものが大幅に減少していく社会状況の中で、定時制高校ではどこに存続の意義を見いだすのか、どうやって生徒数を確保していくのか、職場での議論と模索が始まった。

五年ほど前に当時のF教頭（後のF校長）が、長崎市内と近郊のすべての中学校を一人で回り始めた。学校説明会を開いても、中学校側では定時制高校はほとんど無視で集まらず、待っていても意味がないと判断したためだった。翌年から、教頭一人では大変だと、全教員が二人一組で手

分けして回り始めた。その際、何をもって本校の教育的メリットをアピールするのかが共通の認識として必要になったのである。

議論の結果、明らかになってきたことは、その時点で既に一定の傾向として現れ始めていた不登校経験者の自己回復現象だった。長崎県内でも高校中退者や不登校は増加の一途をたどっている。統計に現れない潜在的な不登校を含めて、小・中・高ともに深刻な問題となっている。本校にも中学時代の不登校生や他の高校で不登校となって転入してくるケースが年々増え、そのすべてが登校するようになるわけではないが、六割ほどは不登校だったという痕跡すらないくらいにのびのびと高校生活を送るようになる。しかも、この生徒たちは、かつての「定時制にしか行けない」という劣等感ではなく、「この学校で学んでよかった」という喜びをもち、他者にも誇らしげに伝えている。教師たちがそれまではただ「現象」として感じていたこのテーマを正面からとらえ直すきっかけとなったのが、「中学校訪問」

の取り組みだった。

K校長は「不登校生が生き生きとよみがえる学校」をつくろうとスローガンをたてた。次のF校長は「生徒の居場所づくり」をスローガンとした。そして、「不登校生はどうぞ、うちの学校にいらっしやい」と手を広げて受け入れるようになったのである。

しかし、不登校生受け入れの共通認識はできたが、育てるための共通認識・方法論となると、なかなか議論が深まらないのが現状である。定時制の持つ独特のゆるやかな雰囲気と、教員一人一人が経験から身につけている生徒への接し方、多層の年齢・生活環境の学習集団が持つ本来的教育力。それらの蓄積に頼っているだけでは解決できない多くの問題が次々に起こってくる。

「不登校」問題をどうとらえるのか、その原因・背景をどう考えるか、個々に現象の異なるケースをどう理解し、一人一人の生徒にどう接して行くのか、父母・家族とどう接するか、学校は学ぶ場としてどんな手助けができるのか。すべてがまだ模索中である。ここでは、ことばの学習における自己回復・自己発見の筋道について、実践の一部を報告する。

一 自我意識を核とする「ことばの力の体系」をそれ

に基づいて四年間の授業

私の教科は「国語」であるが、自分では「日本語教師」

と考えている。「母語としての日本語教育」が私の専門である。日常生活でなんとなく身につけてきた日本語という言葉で、生きていくための武器としていかに使いこなしていくか。自分の人生を構築し、他者と結び合って生きるために、いかに豊かに自ら育てていくか。その術を分かち合い、手助けするのが、(母語としての)日本語教育の役目である。

私が現在、授業構築の根拠としているのは、自らの実践から生み出した「自我意識を核とすることばの力の体系図」(資料一)である。この体系図の持つ意味について詳しく述べることは紙面の都合でできないが、一人の人間が生活する中で使うべき本来のことばの力を体系的に示したもので、学習とは、この本来の自然な活動のサイクルに沿って組み立てられたとき、初めて機能し、意味を持ち得る。図中のA～Nすべてを視野に入れ、学習活動を組むべきだが、それはかなり大規模な学習活動になり、時間も要するので、段階を追って、部分的にレッスンとしての学習活動を組み立てていって、やがて、トータルにつないでいく。しかし、多くの「国語」の教室では、小・中・高十二(十三)年間もかけて、せいぜいF～Iの段階しか取り扱っていない。これでは、生きたことばの力になりようがない。授業のちよつとした工夫とか、興味づけとかのレベルではどうしようもない根本的な学力観の問題である。

この「ことばの力の体系」に基づいて授業を構築すると、三年間ないし四年間の見通しがどうしても必要になってく

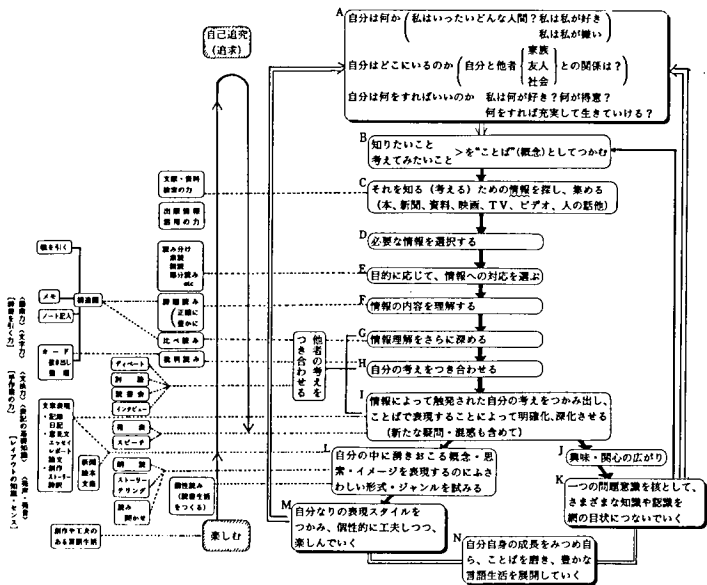


図1 ことばの力の体系

完成期 3年	発展期 2年	入門期 1年
		グループ学習活動 図書室での調査、 資料づくり 発表のしかた
自分たちで 行う授業	批判読み 構造図をつくりながら 読みとりの力をつける	課題読み (読)
卒業レポート 個人文集	朗読・群読 討論・インタビュー 聞き書き 意見文 小論文 創作 新聞・通信	話すこと、聞くこと 声で表現すること (朗読) (聞・話)
	読書生活をつくる 図書館について知る	ノート取り 生活文、随筆、 空想文、意見文 (綴)

言語活動面の3年間の見通し (4) 図2

る。つまり、入学時から卒業時までを見通して、どこまで
の力を育てて送り出すのかというビジョンである。これは、
目標を画一的に当てはめるといふ意味ではなく、一人一人
の持っている力を見極めながら、発達の筋道を探り当てて、
手助けしていくためにも、必要なビジョンである。
そのビジョンによって構成された実践の一例として、あ
る学年の四年間の授業の流れを(資料二)に示す。

あるテーマについて、教材を組み立て、多様な言語活動を組み込む「総合単元学習」の方法をとる。教科書教材も使えるものは使うが、基本的には必然的に自主編成となる。四年間の組み立ての基底にあるものは、『自分自身を見つめ、語ることはば』を育てることである。そして、高校卒業時点でそれまでの『自分史』を明らかにする力をつけることを目標とする。

自分を語ることを育てる、それは即ち、自分が生きる同時代を考える力をも育てることである。故に四年間のビジョンの縦軸に『自分史』を置き、横軸に『同時代の課題』を置いて単元のテーマを配列していく。またさらに、自分→社会の順で問題を考えるのではなく、逆に社会→自分と考えていく。それは、人間にとって、自分自身の問題と向き合うことが最もしんどいことであり、人間関係で傷づいてきた生徒たちに自分を語らせるのは、大変残酷でもあるから、十分な癒しの期間がとれるまで、自我の問題は正面きつては追らない。自分のことはさておいても、人間は周りの問題、社会の問題は考えることができる。自分でも考えることができる、発言することができる、行動することができる、という自信がついたとき、自分と向き合う勇気もできてくるからである。

本校では校内生活体験発表会が六月にあるため、全校行事として生活体験作文を書かなければならない。これを逆手にとつて、この時期自分を見つめる小さな作文を書きた

めることによつて、四年間通せば自分史になっていくという形で授業構想に組み込んでいる。

入学したときは、筆記具も用意しない。ノートも取らない、寝ているだけで卒業出来ると思つている。そんな生徒たちが、卒業するときには、大学の卒論なみの卒業レポートを書き上げ、一人一冊の独自の世界を表現した本を作り上げていく。きちんとした方法と手だて、適切なフォローさえあれば、それができる。

それは、四年間の様々な場面で一人一人が表現したものを丁寧に読み、一対一でことはばを交わし、心を解きほぐしていく積み重ねの上にある実績である。

二 Kくんの場合：おしゃべり言語から意識的思考言語へ

Kくんは中学からストリートに入学してきたが、学習意欲がなく、授業も出たり出なかつたりで、一年の途中から進級をあきらめ、翌年もう一度スタートし直した。根はやさしく、ひとなつこい性質だが、学力が極度に低いいため、授業についていけず、絶え間無くしゃべつていているという生徒だった。また、ことはばの力の弱さから、自分の気持ちをうまく表現できず、すぐにカツとなつて暴力的行為にでることもあつた。留年したので、クラスの中では年上格で年下の生徒からは「さん」づけで呼ばれ、遊び人派グループの中では引つ張り役だった。

資料三、四

ことばの学習に関しては、私が担当してからの初めの二年間は、易しい作業もなかなか取り組もうとしなかった。彼のおしゃべりにつきあつて、最後の五分間ぐらいに「これだけは書こう」と持ちかけ、少しずつプリントをさせる、という具合だった。

一年の終わり頃、暴走族と一緒に走っているところを補導され、拘留所に留め置かれるという体験をする。それを機に、本人に「反省日誌」ではなく、覚えている限りの自分史を書いてもらった。特に教師から目をつけられ、敵対関係になったという中学三年の時の体験、その時の自分の気持ちを書けるだけ詳しく書くように指示した。自分のことばで文章を書くことなど一行もできなかった彼が、この時は必死で書いた。

留置場に面会に来てくれた、自分に付き合ってくれた、という思いが、彼の教師不信を和らげ、「こいつの言うことには、つきあつてやつてもいい」と思ったのか、学習への取り組みも少しずつ素直になってきた。まだ、自分で考えて書くことはできないが、人のプリントを見せてもらつて埋めていくということはコツコツとやるようになった。

Kくんが初めて自分の内面を見事に表現したのは、三年の三学期、ショートストーリーづくりだった。単元「ことばを学ぶ、ことばで生きる」の中で、「もし〇〇がことばを持つたら…」という設定で創作してもらった。閉じこめられていた思いがことばとなつて発せられるギリギリの

了兵生三季新の字がよリ

服大(三)は(三)は(三)は(三)は(三)は

三、い(三)は(三)は(三)は(三)は(三)は

洋服ダンスで

三年 Kくん

ぼくが洋服ダンスのハンガーの所にいくと、「今日はぼくを着てくれ、ぼくを着てくれ」と言う。ハンガーの所を見ると、もうぜんぜん着ない洋服もいるし、買ったばかりの洋服もある。ぼくが新しい洋服を買ってきた、ハンガーの所にまよかになる。「君は生地がきれいだし、色がいいわ。その点ぼくの色は暗いし、やぶけてるところはあるし、もうぜんぜん着てもえない」とか、そういう会話をたいたった。もうぜんぜん着ていない洋服は、いっつもとんぼりしてかわいそうだった。

洋服ダンス

三年 Kくん

状況を、創作の形を借りてイメージしてもらおうのがねらいだった。そこに、他者に思いを伝えたいときの自分を無意識のうちに投影できるだろうと私は仮説を立てていた。

Kくんが選んだ主人公は、洋服ダンスで眠っている洋服たち（資料三）。実際、彼はなかなかのおしゃれさんで、新しい自慢のファッションで来たときなど、顔が輝いているのだ。その自分をよくとらえているし、彼のやさしさも表れた作品である。この作品を生徒会誌の文芸欄に選んで載せた後、クラスの中の真面目派生徒たちの彼に対する評価が変わったのである。Kくんの言動に眉をひそめていた生徒たちが、彼のプラス面を認めていく。

Kくんが自分を表現することばを持つにつれて、短気な感情的な言動は鳴りを潜めていった。わがままなふるまいはまだあるにせよ、落ち着いて学習する態度が身につけていった。

四年二学期～三学期の卒業個人文集づくりでは、Kくんも見事に作品を作り上げた（資料四）。この時既に、おしゃべりだけで一日を塗りつぶしていたKくんではなく、自分のことばで思考し、表現し、その喜びと自信を語れる若者に成長していたのである。

三 Aさんの場合：強烈な自我・思考の深さ故に絡ま

ることばが、ほぐれていくまで

Aさんは中学時代、ほとんど学校に行っていない。高校

も行けないだろうとあきらめかけていたが、定時制なら行けるかもしれないと入学してきた。

Aさんは、自我意識も学習能力も極めて高い生徒である。強固な自分の世界を持つが故に、学校に適応できなかったタイプの不登校生で、演劇や映画に対して幅広い知識と確たる好みを持つていた。その好みは「シブイ」とさえ言えるもので、通常の同年齢の女子高校生たちとはとうてい話題が合いそうにない。

一年の時は、高い能力を持つにもかかわらず、自信がなく、学校も来たり来なかったり、出席も安定しなかった。作業のときは、口は達者だが手や体が動かない、という生徒だった。

Aさんの思考回路の特徴は、彼女が書く文章に顕著に表れていた。問題意識もあり、深く考えていることはよくわかるのだが、文脈がひどくもつれている。文法力が劣っているためではない。どうやら、多くのことを同時に考え過ぎて、整理がつかないまま書くので、その思考回路のままのこんがらがった文脈になっているらしい。そのことが、彼女の自信のなさにもつながっている。

Aさんは、自分の日本語表現を大変もどかしく思っていた。何かおかしい。何かいま一つ、うまく表せない。その自覚があったので、二人で話し合いながら絡まった糸を解きほぐすように文脈を解いて行く作業は、着実に進んだ。次第に彼女自身で解きほぐして行けるようになった。

絡まったことばを解きほぐす過程は、思考を論理的に整理していく過程である。それが自分自身を受け入れ、自信を取り戻すことにつながっていく。

本来、独自の豊かな感性を持つ生徒なので、表現方法を自分のものとするので、潜在する能力をどんどん開花させ始めた。それがまず現れたのは、一年二期期の「竹取物語」を丸ごと読んで、ある登場人物の視点から小説として書き換えるという学習の時。Aさんは本当はかぐや姫と甲乙つけがたい硬派の女官を取り上げたのだが、材料不足と判断して断念、竹取の翁の視点で見事に心理描写を行った。その後、どの単元の学習も確実に自分のものとし、四年最後の個人文集に彼女の世界を存分に發揮している。(資料五)。

四 Rさんの場合：他者に素直でありすぎたために空

洞化した自我をとりもどすまで

Rさんは、前述のAさんと共通する点、また、対照的な点を持っていた。中学校時代ほとんど登校せず、ストレートで本校に入学してきたこと、学習能力や意欲が大変高いことはAさんと共通する。しかし、自我のありようでは、対照的だった。Aさんが頑固と言えるまでに自分の世界を持つているのに対し、Rさんは他者のことばに大変素直に反応し、何でも吸収しようとした。それは一見、向上心の現れのように見えたが、核となる自我が弱く、自分がない

ままに何でも受け入れようとしたため、気がつくとも本当の自分がわからなくなってしまうのだった。

書く文章も二人は好対照だった。Aさんが頑ななまでに自分の思考に固執して文脈の混乱をきたしていたのに対し、Rさんはさらりとそつなくまとめ上げるのだが、何かもう一つ深いところに思考が降りて行かないもどかしさが付きまわっていた。

同じ学年の中で、中学時代の不登校経験も似ているし、学習能力も抜きん出て高いので、ふたりはいつもペアで行動し、周りからも一対で見られていた。職場も同じ、部活も同じ、生徒会活動も一緒。仲良し二人組と見られていたが、実際には、内面のありようが全く異なり、その違いがきちんと認められないまま、自己喪失状態に再び陥ったのは、Rさんの方だった。

Rさんは元々活発な、好奇心旺盛な生徒で、本校に入学してからは、和太鼓部、バドミントン部、生徒会役員など、どんどん積極的に活動していた。人前に出て発言することも物おじする事なく、堂々と自分の意見を述べることでできた。にもかかわらず、自分と対峙するだけの本当の自我が形成されずにいたのである。

三年まですばらしい成長を続けているかのように見えたRさんが、四年になったとたん、パタリと登校できなくなつた。再び学校に戻ってきたのは、九月半ばだった。この二度目の不登校の最中、彼女は自分と向き合い、過去の不登

卒業個人文集 [レポートの部]

姓 名 A さん

テーマ クラゲの世界

目次(レポートの構成)

はじめに

- クラゲ
 - クラゲの種類 / 1. 種類 / 2. 一生 / 4. 生活環境
- 浮遊
 - 浮遊 = 浮遊体 / 2. 浮遊体 = 浮遊体 ...
 - 浮遊体 ...
- 発光
 - 発光するクラゲ / 2. 発光の仕方
- 危険
 - クラゲの毒 / 2. 大食漢のクラゲ
 - クラゲの生態
- 水母
 - クラゲと水母の区別理由 / 2. 水母のクラゲ

おわりに
参考文献 資料一覧

◆ 'はじめに'の序(内容の整理、まの目、読みたいこと ...)

「クラゲ」にはなぞ海を漂遊する、と書いてはいるけれど、自身 クラゲのことが何とかならぬ。という現実があった。そこで、未知の世界のクラゲを調べてみようと思った。

調べていくうちに、その中でもクラゲの発光が面白い。そして、それが何故、クラゲに必要なのか、答えをさがして見たい。

◆ 研究を進めて(探して)。わができたこと、思ったこと、考えたこと。

クラゲが、インクを吐くクラゲの仲間だとはいえなかった。クラゲと書いて、結構な動物生態系をもつ。生活しているのだから。あらためて見た。アフリカと浮遊しているばかりじゃなかった。浮遊体には生活可能なものがある。と分かって。クラゲの「クラゲ」は、少くも変化してきている。変化してきているけれど、何も知らなかった時より、発光がでてくるものを探した。「クラゲ」は、2つにわけてみることにした。1つは「クラゲ」として、2つは「クラゲ」として、2つに分けてみる。と、思っていた。一部の本によると、クラゲは3つに分けてみる。と、思っていた。と、思っていた。と、思っていた。

◆ 参考文献 資料

- クラゲの本誌 華研社 研成社
- 水鏡は海へ飛ぶ 岩波書店
- 生物の誕生をめぐり 村松元 岩波書店
- 海洋生物 村松元 岩波書店
- 海への生命 佐々木忠義 岩波書店
- 海洋の生命 小野 秀雄 講談社
- 海辺の生き物 奥谷高司 山と溪谷社
- 海洋生物の加ホルシゲル 奥谷高司 講談社
- 科学の図鑑 奥谷高司 朝日新聞社
- 海洋生物事典 奥谷高司 朝日新聞社
- 海洋の謎 奥谷高司 朝日新聞社

◆ レポート作成上、苦労していること。

- クラゲのデータをまとめるのに苦労した。
- クラゲの生態、生活環境、発光の仕組みが分からなかった。
- 項目分けがなかなかできなかった。
- 文章がまとまらない。参考文献の資料が足りない。という点に、苦労している。資料の整理が、まとまらない。

◆ 今後の作業予定、課題

- ① レポートを書く
- ・ 項目ごとに10分程度ずつ、まとめてみる。
- ・ 文章をまとめる。30分程度書く。

4 1 第 頁 名 Rさん

登校拒否

目次(レポートの構成)

はじめに

1. 登校拒否の一般的特徴
2. いろいろな登校拒否例
 - ・○○さんの場合
 - ・○○さんの場合
 - ・○○さんの場合
3. 私の登校拒否
 - ・私の持ち方 ← ・私の変化
 - ・親の立場

おわりに

参考文献 資料一覧

◆参考文献 資料...

登校拒否 新田なるみ 校せら 横湯園子 新田出版社
 不登校 登校拒否 山本千代 奥田明子 金子書房
 登校拒否 学校と心の深層心理 金沢喜市 女性政経
 月刊旬報社
 登山の心 10 思春期の峰 高田忠一郎 新日本出版社
 エゴイズムと登校拒否 若林実 ちくま書房
 人が首を吊る条件 反木克行 北水
 登校拒否はこうしてなる 吉岡康理 出版文化社
 登校拒否をふたで相談室 東地孝子 村田光男 東社
 登校拒否をどうにもするカウンセリング 石郷岡奈
 親子で学ぶ 妻部由子 登校拒否PART2 北学原吉
 北澤美奈子 毎日新聞社

◆レポート作成上、苦労していること

まだまだな種類のもの、体験があるのでは書き出したらきりがありません。

だから自分も登校拒否の何、にっぴりレポートを作製したのがよく済まなければいけないことが、とても大変です。

あと、日にちをおわけています、予定をたてたことがなければいけません。

◆はじめにの手(読者の期待: さ、おつ 泣かしたいこと... etc)

卒業を目前にして、いまだに心にひかかることがありました。登校拒否、私の今の人生の中で一番苦しみ、一番悲しい時でした。自然と時は流れて高専を卒業する今でも、中学生だった私の時は止まったままのよう気がしますが、そんな私を、もうどうどう解放してあげたい。

そして、同じ登校拒否(不登校児)の! かに私を見てくれている気持ちを返してあげたいと思っています。

◆ 研究を進めて(答えて)。わが、できたこと、思っていたこと、考えたこと。

登校拒否の一般的特徴という記事をを見て、自分の気持ちの問題だと思ってきたことが、他人から分類されていくことに驚いた。そして、あがかった。

親から来たもの、数々の本に、親のつらさを感じ、私も少しづつらくなった。

同じテーマの本でも、全然ちがっていて、それ以外の体験も、似ていたり。ちがう。治りやすい、薬のいいエピソードのようで、そのぶん周りの人は、すごく大変だろうなと思った。直接的に何をすべきなないことが、もどかしくて、悲しくて、強くなるとは思わなくて、このようにならなくていいからいいかな... と思った。

◆今後の作業予定 課題

2. について、たくさん本をよみ、3人の例と出す。このときに、描きひろくつなご。
3. の私の体験は、つらくて、かえりかたが、なるべくリアルに親の気持ちも、リアルな感じ、泣かさないように、いっしょに開こう。

感謝の気持ちをもてる!!

校経験をも見つめ直して行つた。そうして、四年最後の大事業、卒業個人文集のレポートの部で、迷い抜いたあげく、自ら「登校拒否」をテーマとして選び、今まで敢えて避けてきた問題を初めて自分自身で解き明かそうとしたのである。レポートの中で、彼女は不登校についてのさまざまな文献を読み、自分自身の体験をたどり、分析し、さらに母親にインタビューして親の立場や心理にまで迫っている。その作業を通して、自分を取り戻し、母親との関係を取り戻しているのである(資料六)。

KEN(テレビ長崎)ドキュメンタリー『夜間高校生1居場所を見つけた子供たち』は、二人の軌跡を軸に、本校生徒の一年間に密着取材して制作された。

五学校行事で、自分を見つめる場としての生活体験発表会
 定時制・通信制には「生活体験発表会」というものがあり、以前は働しながら学ぶ高校生生の体験を発表し合うスピーチ・コンテストのようなものだったが、勤労学生の減少と共に、内容の比重が学校で学び得たことに移ってきている。校内の大会↓県大会↓全国大会とつながっているが、校内でどのように取り組むかは、同じ県内でもまちまちらしい。本校では以前からかなりカッチリと校内の発表会をやっていた。

私が赴任した七年前、クラス代表を出す前に、全員が生
 活体験文を「国語」の時間内に書き、「国語」の点数とし

1997.5.29.(4)
 第16回 校内生活体験発表会 実行委員会

- 目的 (1) 働きながら学ぶ定時制生活の体験を書き、自分で、自分を見つめ、自信を養う力、自己生活を積極的に肯定する力を育てる。
 (2) 発表者の体験を聞くことで、進学の路に耳を傾け、進学の生き方に学ぶ態度を育てる。
 (3) 本校が体験文を書き、発表を聞くことによって、全校参加の行事としての意義を高める。
- 期日 1997年6月27日(金) 18:00~20:30
- 会場 本校 体育館
- 発表者 各クラス1名以上 計12名以上
- テーマ 学校、家庭、地域等での具体的な生活体験に基づいたもの。
- プログラム (1) 開会 (2) 校長挨拶 (3) 生徒会長挨拶 (4) 発表 (5) 審査(8~3教室にて) (6) 講師(審査委員長) (7) 表彰(後日) 演マイク使用
- 審査基準 (1) 時間…7分程度 (2) 記点…内容6.0点(発聲、論旨、印象、真実性、共感性、発声力) 方法4.0点(態度、表情、好感度、意図、時間) (3) 表彰 優秀賞3名 優等賞3名
- 審査員 <職員> ☆職員1名、副委員長1名、各学年1名(副委員長1名)
 <生徒> クラス代表1名 計12名 (合計…審査委員長)
- 係分団(生徒会役員・職員)

	生	徒	会	員
司会・進行				
計 画				
採点カード回収				
集 計				
記録・カメラ				
演 壇				
後 援				

- 準備 (1) 原稿作成…日曜日は朝早くから始めて一泊に徹する。
 6月4日(水) 2~3校時を当てる。
 *1校時は学習発表
 *2~3校時はその時間の授業開始。出席、監督はその時間の担当。
 *副教科教師が出来るだけ担当クラスをまわって、増援、増援になる。
 *欠席者は当日、整理とするか、適切な時間を設けておこなう。(副科員、担任の判断)
 この日までに原稿の校閲で原稿指導を行う。(原稿、構成、表現、原稿用紙の使いなど) 原稿の校閲に1泊。
 原稿の長さは規定の用紙(25×22.2)4枚程度
- 選出・指導…学級担任がクラス代表を選出する。発表指導には生徒会顧問が当たる。
- 日程 5月26日(月) 原稿指導(国語科)
 6月 3日(火) 原稿指導(国語科)
 4日(水) 原稿作成(一斉)
 5日(木) 代表、生徒審査員選出、発表題目一覧表作成
 12日(水) 発表練習開始
 17日(火) 発表物の準備終了、生徒審査員指導
 20日(金) 発表指導、マイクを使ってのレハーサル
 23日(月) 発表指導(指示、校正)
 25日(水) 採点準備(指示、校正)
 27日(金) 校内生活体験発表会
 30日(月) 審査委員会(少人数)
 日() 表彰
- 用紙、物品等の準備
 ○原稿用紙(下書き用、原稿用)
 ○表彰関係…賞状、盾(授賞書、別賞券)
 ○審査関係…審査カード、賞状用紙、賞計用紙、賞計一覧表
 ○記録・写真
 ○掲示物…掲示用紙、旗
 ○掲示物…掲示用紙、旗
 ○その他…クラス代表、題目、クラス審査員代表者、演壇一覧プログラム

て評価されるという強制的課題として設定されていた。しかも、その指導は「国語科」教師にだけまかされ、クラス代表を選ぶのに、担任が「国語科」教師に一任するという空気もあり、その負担は大変なものだった。

私は個人的にはコンテスト、コンクールなるものが嫌いだ。ことばの教育の視点から弊害にしかならないようなものが多い。しかし、生活体験文を書くこと自体は、とても意味のあることだ。それを人前で話す力をつけることも重要なことだ。そこで、従来から学校行事の一つの要として行われてきたこの生活体験発表会を強制的課題と単なるコンテストから一人一人にとって意味のある自己発見の場として活用できるように、取り組み方を少しずつ変えて行くことにした(資料七)。

①校内大会要項の目標が、全国大会・県大会そのままに
なっていたのを、本校独自に「自分を見つめる機会」
「他の人の体験に耳を傾け、学び合う機会」という点
を強調するものに変えた。

②コンテスト性をできるだけ薄めるために、発表時間は
目安として、ほとんど気にしなくてよいようにした。
発表者の心理を考え、制限時間を過ぎててもベルは鳴ら
さないことにした。

③全生徒の作文指導については、事前指導は「国語」の
時間に行うが、作品を仕上げる時間を全校一斉に設け、
全教員がそれを見守ることとした。その時間の監督と

は別に、「国語科」教師が担当クラスを回り、書き悩
んでいる生徒の相談に乗るようにした。

④生徒の作文は、まず担任が読み、クラス代表選出まで
責任を持つよう、全教員で確認した。その際、作文力
と発表力が一致しないこともあるので、生徒の心理状
態、成長の度合いも含めて、担任と「国語科」担当が
相談して選出してもよい。

⑤不登校やいじめで人間関係に傷ついていた生徒がほと
んどという学習集団にあつて、自分について語るとい
うことは、大変なことである。書くことすら大変なの
に、まして人前で話すとなると、そう簡単にクラス代
表になる生徒はいない。そこを教師がどう促し、励ま
すが鍵だが、どうしても代表が出せないクラスには
強制しない。逆に複数出せるクラスは制限しない。本
校は十二クラスだが、例年十名十三名で校内発表会
を行っている。

⑥発表者、生徒審査員(各クラス一名)が出揃った段階
で、それぞれに対して、事前指導を行う。

生徒審査員には、審査の方法、どんな点を評価すればよ
いか、を伝える。話し方の善し悪しではなく、発表者の伝
えようとする内容を聞き取ること。

発表者には、せつかくのすばらしい内容を、聞く人に十
分伝えるためにはどんな話し方、声の出し方をすればよい
か、丁寧に個別指導し、ステージ上で自信を持って話せる

資料二

までにする。発表会では、発表者ひとりひとりのスピーチが全生徒の教材となる。だから、それを最大限生かすことが、発表者自身の力にもなるし、聞く生徒達の力にもなる。自分の作文ではうまく表現できなかったことも、生徒達は発表者のことばを聞いて、「そうだ、そうなんだ」と自己表現の学習をする。また、同じような体験で苦しんだ人の存在を知ったり、異なる体験や考え方に触れて、他者への目を開いていく。現在、本校では生活体験発表会は大きな学習の場になっている。

生活体験発表会と「国語」の授業の役割については前述したが、私の授業の中で生活体験文の事前指導に用いているワークシートがある（資料八）。作文を書くことは結果としての産物であって、それよりも自分を見つめるためのワークシート記入ができることのほうが意味は大きい。

生活体験発表会のための作文がなければ、私は独自に自分史を四年間の授業の軸に据えるところだ。本校では、生活体験文が課題として全校的に取り組まれているので、それを四年間書きためて行けば、おのずから自分史ができあがってくる。そこで、毎年六月の校内発表会に合わせて、ただ作文を書くだけではなく、自分と心の世界を考えるための教材を選んで単元を組むのである。その教材の中には、全国の高校生の生活体験文も必ず入れ、他者の体験に学び、自分の生活体験文のヒントにもする。

ワークシート記入の後、実際に作文に入るが、どんなに

1 年 (1993年度)					学年 (年度)	
3~2			1		学期	
日本最古の空想小説を読もう		ことばのマナー	自分の生活体験を見つめて書こう		単元	
<ul style="list-style-type: none"> ○「糸車」(小説) 山本周五郎 ●「祖国に生きる」(随筆) 高野聖 	<ul style="list-style-type: none"> ★「竹取物語」全文(古文) ★話を聞いて新しいことばを知ろう ★「二ユーランド旅行から 	<ul style="list-style-type: none"> ●「ことばと人間関係」 1. 手紙の型外山遊比呂 2. はがき一本 4. 3. 返事と早口 大和と打口 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「羅生門」(小説) 芥川龍之介 	テ キ ス ト	
<ul style="list-style-type: none"> ○「糸車」(小説) 山本周五郎 ●「祖国に生きる」(随筆) 高野聖 	<ul style="list-style-type: none"> ★「竹取物語」全文(古文) ★話を聞いて新しいことばを知ろう ★「二ユーランド旅行から 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「羅生門」(小説) 芥川龍之介 	<ul style="list-style-type: none"> ○「昨日今日など」(随筆) 谷川俊太郎 	
<ul style="list-style-type: none"> ○「糸車」(小説) 山本周五郎 ●「祖国に生きる」(随筆) 高野聖 	<ul style="list-style-type: none"> ★「竹取物語」全文(古文) ★話を聞いて新しいことばを知ろう ★「二ユーランド旅行から 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「羅生門」(小説) 芥川龍之介 	<ul style="list-style-type: none"> ○「昨日今日など」(随筆) 谷川俊太郎 	
<ul style="list-style-type: none"> ○「糸車」(小説) 山本周五郎 ●「祖国に生きる」(随筆) 高野聖 	<ul style="list-style-type: none"> ★「竹取物語」全文(古文) ★話を聞いて新しいことばを知ろう ★「二ユーランド旅行から 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「羅生門」(小説) 芥川龍之介 	<ul style="list-style-type: none"> ○「昨日今日など」(随筆) 谷川俊太郎 	
<ul style="list-style-type: none"> ○「糸車」(小説) 山本周五郎 ●「祖国に生きる」(随筆) 高野聖 	<ul style="list-style-type: none"> ★「竹取物語」全文(古文) ★話を聞いて新しいことばを知ろう ★「二ユーランド旅行から 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「羅生門」(小説) 芥川龍之介 	<ul style="list-style-type: none"> ○「昨日今日など」(随筆) 谷川俊太郎 	
<ul style="list-style-type: none"> ○「糸車」(小説) 山本周五郎 ●「祖国に生きる」(随筆) 高野聖 	<ul style="list-style-type: none"> ★「竹取物語」全文(古文) ★話を聞いて新しいことばを知ろう ★「二ユーランド旅行から 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ●「先賢たちの学校生活」 ★「心をはぐくむ」(小説) 山口久美子 ★「長崎高校で学んだこと」梅田洋 ●「卒業に向けて」(随筆) 佐々木美佳子 2. 全国の定時制高校生の生活体験 ★「定時制から学んだこと」佐々木美佳子 ★「今の私」(随筆) ジョージ・キョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「羅生門」(小説) 芥川龍之介 	<ul style="list-style-type: none"> ○「昨日今日など」(随筆) 谷川俊太郎 	
HGF	MH GF	F	HF	IAHF	CHLF	(図1) 段階
	文化祭 新聞 全文 竹取物語 (分組) 八幡面 (分組) 「そら」 竹取物語 茶屋			校内 発表会 生活体験	図 用 室 利 用 オリ ジナル	備考

力が弱い生徒も書けるように、考えられる内容の柱を質問形式でたくさん挙げておく。生徒はそれに答えるように書いていけば、四百字〜六百字は少なくとも書ける仕組みである。それでも難しい生徒は、一対一で、話を引き出しながら、一文ずつ書いてもらうこともある。

「国語」の時間内に下書きまでずませず、一斉原稿作成日はスラスラと清書すればよいところまで準備しておく。

私が取っている方法は、本校の「国語科」として一致してやっている訳ではない。ワークシートや教材の交換はするが、それぞれのやり方があるので、それを尊重している。

ただ、校内の人権に関する職員研修で事例報告をと言われ、一人一人の生徒が表現したことをどう読み取っていくか、について提起したことがある。その際、生活体験文にふれ、全教職員が接するこの生徒の自己表現の機会に、どんな視点で生徒の内面を感じ、読み取り、寄り添って行くかについて、問題提起をした。『自己回復』『自己発見』と抽象的に表現するのはたやすいが、具体的にはどのような言葉や現象として現れるのか。成長だけではなく、混沌、逡巡、後退、螺旋サイクル……さまざまな様相を見せる生徒達の心模様を読み取るには、教師の側も具体的事例研究に基づく力量が必要である。ことばの教育に関わる者が、その立場でつかみ得ているものをどう職員全体に還元して行けるか、これからまだ追究して行きたい。

3 年 (1995年度)			学年(年)	
3	2	1	学期	
ことばを学ぶことばで生きる	私と世界と平和	人を導くもの	単元	
<p>●英語圏の国が払う代償(『新出』小島)『フレデリック』松本三郎『レオニ』ことば・言葉のものがたりもしいある時(○)ことばを『アイヌ語を訪ねて』川崎祥『評論文へことばを学ぶことばで生きる』を教くために</p>	<p>●平和かるたことばづくり『戦後六十年』『戦争が事』『元来野の四十年』(『演説』ツッパ)『ゼッカイ』</p>	<p>★の話：二度のニュージーランドの考えごと・反核・自然との共生 ●『広がる米原爆戦争』『スラニラの脱出』『新聞記者』『アメリカ人の原爆観』『アメリカ人の原爆観』(『カ』『平和と人間を考える』『平野』『外内』『平野問とこは?』</p>	<p>★の話：ことばの学習のすめ方 ●ことばの力を向のめにつけるか ●今年一年間でつづけたことばの力</p> <p>○『雑説』(漢文模範)</p>	<p>話と聞きとる メモ(要感)</p> <p>自分のことばの力について(これまでの成長の自己評価)『文苑でいききたい点』</p> <p>漢文の読み方 返りの点書き下し文 訳の記入(説明をきいて) 構図(部分) 構図(部分) 『私の伯夷論』を教く 感想を教く</p> <p>感想 構図 生活体験文を教く 学習ノートのまとめ 人を導くもの</p>
<p>課題よみ 心ひかれる表現を拾う ことばの力について考えて教く ショート・ストーリーを教く 他者の意見を比較し構想 評論文を教く</p>	<p>課題よみ(事実認識を深める) 比較よみ 見直し</p>	<p>課題よみ(事実認識を得る) 批判よみ 1 短い意見文 五人のグスタの各自身地を講義 ひまわりアイルランドの生徒・発言 他人の生徒・聞き入る メモ(ペナラーの発言)</p>	<p>課題よみ(説明をきいて) 漢文の読み方 返りの点書き下し文 訳の記入(説明をきいて) 構図(部分) 構図(部分) 『私の伯夷論』を教く 感想を教く</p>	
KJMLIHGFBA	KJIHGFA	HF	KIHGFA	
			BA	
			1)段階	
			備考	

六 詩集「定時制の詩(うた)」

一九九六年度の文化祭で展示した生徒達の詩が、教職員内でも父母の間でも評判になり、「冊子にまとめたら」ということになり、PTAの財政協力で『定時制の詩』という詩集発刊が実現した。

授業から文化祭へ、そして詩集発刊へ。その詳しい経緯と学校として詩集発刊に取り組んだ意図については、『定時制の詩』誕生―あとがきにかえて―に詳しいので、参照してほしい。この詩集は他のどんな資料より生徒達の生の声を素朴に伝えるものとして、多くの人達に讀まれていった。

「毎年できないか」との声もあるが、私としては機が熟してこそできるものと思っているので、毎年取り組みますなどと恐ろしい約束はしない。取り組みそのものが目的なつては、実践の命がなくなる、そういうものだと思う。毎年毎年、目の前の生徒達と共に創り出せること・共有できることを模索し、実践して、結果として一つ一つ形になっていく。また、「全く同じことは二度としない」のが私の信条でもある。自分自身がマンネリに陥らないために。一度うまくいったからといって、それを実態の違う生徒に押し付けるといふ過ちを冒さないために。

ともあれ、続く今年度の文化祭での詩の展示も好評であった。試作の方法は昨年とは全く異なる。今回は二年生のクラス展示で生徒たちが「詩を書こう」と決めたのだった。

4 年 (1996年度)		学年(年度)
3~2		学期
卒業個人文集を作ろう		単元
出発の詩	卒業個人文集 作製 第1部 レポート 第2部 私ワールド 第3部 ことばの海へ	★「ことばの力の体系図」について メモ 4年生完成型の目標を明確にする
詩つくる	レポート・自己発見の証 文芸検定・簡報選択 自立で・清浄 私ワールド:自分史年表 人物関係図:自分の世界探し こぼの海へ レイアウト (-)一枚の絵から アンソロジー 好きなことば・詩歌探し コメントをつける 本として体験を整える 序文 目次 編集後記 扉付け 興付け	言語活動・ことばの力 「ことばの力の体系図」について 説明をまよき理解する 4年生完成型の目標を明確にする
NKJMLIHGFEDCBA	KJHGF	IHGFA
文化祭 中間を 報告を 展示	旅行 金租と入 間を考へ る夕べ	校内生活 体幹修学 発表会 修表会
		F
		(図1)段階
		備考

ちょうど二学期の授業が「詩心を探そう」という单元だったからか、因果関係は明かではない。担任から頼まれて授業中に詩をつくって展示につないでいった。「これも詩集に」という声は早くあがっている。PTAが全面的に協力して生徒たちの作品が形になって行く流れができているのは、ありがたいことである。

授業の中で育ったことばの力は、教室の中にとどまることなく、市民へのアピールの場「定時制高校を知るつどい」での朗読劇、文化祭での創作劇などへつながっている。表現の方法を我がものとした生徒たちのエナジーがどこへ向かって行くのか、どこまで伸びて行くのか、楽しみは尽きない。

(長崎市立長崎高等学校)